

別記

審議概要

1 公開案件の審議

(1) 報告1 スクール・ミッションの再定義について

ア 説明員 唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長

イ 結論 報告を了承

ウ 審議内容

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

資料を御覧ください。1の背景ですが、スクール・ミッションは、既に、どの学校においても独自で作成しており、校訓や校歌とともに、学校経営の根幹として位置付けられているものです。

しかし、今般、高等学校、特に普通科の高校では、生徒の目的意識や学習意欲の低下、大学受験に特化しているなどの課題が多く見られ、改めて、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各学校の特色化・魅力化を図る必要があることから、昨年11月、国の新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループによる「審議まとめ」及び本年1月の中教審答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の中で、スクール・ミッションの再定義とスクール・ポリシーの作成の必要性が示されたところです。

次に、別紙1を御覧ください。本資料は、スクール・ミッション及びスクール・ポリシーの概要であり、上段には、スクール・ミッションの策定について示しています。スクール・ミッションについては、設置者が各高等学校やその所在する自治体等と連携し、学校の歴史や伝統、現在の社会や地域の実情、生徒の状況を踏まえて、各学校の存在意義や期待される社会的役割等をスクール・ミッションとして再定義することとしています。

次に、資料中段以降ですが、策定したスクール・ミッションに基づき、各学校が育成を目指す資質・能力の明確化・具体化を図るため、高等学校の入り口から出口までの教育活動方針、いわゆるスクール・ポリシーを策定し、公表することとしています。資料に記載のとおり、スクール

・ポリシーには、卒業までの「育成を目指す資質・能力に関する方針」、在学中の学習に関する「教育課程編成及び実施に関する方針」、入学する生徒のための「入学者の受入れに関する方針」の3つがあります。

国は、設置者がスクール・ミッションを策定するものとしていますが、冒頭に申し上げたとおり、本道の高等学校では、各学校が独自でスクール・ミッションを策定していること、また、広域分散型の本道では、各学校が置かれている環境が様々であることなどから、道教委としては、スクール・ミッションを各学校の実態に応じて選択できるものとして提示するとともに、各学校独自に設定したものを付加して、スクール・ミッションとして再定義することとしたところです。

次に、資料の2に記載の趣旨ですが、先ほど、別紙1で説明しましたので省略します。次に、3の対応についてですが、この後、道教委が作成したスクール・ミッションを各道立高等学校及び道立中等教育学校に提示します。その後、各学校は、地域と連携を図りながら、スクール・ミッションを作成し、8月下旬までに道教委に報告します。道教委としては、最終的に9月上旬に各学校のスクール・ミッションを決定したいと考えています。その後、各学校では、再定義されたスクール・ミッション及びスクール・ポリシーを、自校のホームページに掲載するなどして、広く周知することとしています。

最後に、4の道教委が提示するスクール・ミッションですが、別紙2を御覧ください。スクール・ミッションⅠとスクール・ミッションⅡの2つに分かれており、スクール・ミッションⅠは、連携型中高一貫校、普通科単位制・専門学科単位制、普通科フィールド制、総合学科及びアンビシャス・スクールの学校が、それぞれ該当するミッションを選択することとしています。次に、スクール・ミッションⅡでは、示したカテゴリーの中から、該当するものを1から2項目選択することとしています。しかし、連携型中高一貫校、普通科単位制・専門学科単位制、普通科フィールド制、総合学科及びアンビシャス・スクールの学校については、1項目を選択することとしています。さらに、選択したスクール・ミッションに加え、各学校が独自で策定したスクール・ミッションを最大2項

目まで追加し、スクール・ミッションとしては、1校当たり最大4項目まで設定できることとしています。

今後、スクール・ミッションを策定し、各学校でスクール・ポリシーを独自に作成しながら、入学する生徒の育成という観点で、学校の特色化・魅力化を図ることとしています。

説明は以上です。

【倉本教育長】

御質問や御意見はありませんか。

【橋場委員】

スクール・ミッションⅡについては、各高等学校が、1から2項目選択するとあり、スクール・ミッションⅠから選択する学校については、0から1項目を選択するということですが、もう少し具体的に、どのように理解すれば良いのかを説明ください。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

スクール・ミッションⅠですが、連携型中高一貫校、また、普通科単位制・専門学科単位制、普通科フィールド制、総合学科の学校、そして、アンビシャス・スクールについては、このスクール・ミッションⅠの中から該当するもの1つをスクール・ミッションとして取り入れることとしています。このため、スクール・ミッションⅠを選択した学校が、スクール・ミッションⅡの中から選択する際には、最大1項目ということになるということです。

【橋場委員】

今説明いただいた連携型中高一貫校などは、スクール・ミッションⅠから選ぶということですが、それ以外の学校では、スクール・ミッションⅠからは選ばないということでしょうか。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

そうです。

【橋場委員】

分かりました。次に、このスクール・ミッションⅠとⅡは、道教委が作成したものだと思いますが、作成に当たり、文部科学省からひな形な

どの提示を受けて道教委がアレンジしたものなのか、それとも、道教委が独自で作り上げたものなのかを教えてください。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

ある程度、国からも例示されているのですが、やはり全国的な視野での例示ですので、北海道の学校のスクール・ミッションとしては、なじまないものも多く含まれています。そこで、各学校で独自に策定しているスクール・ミッションを提出してもらうとともに、学習指導要領などを参考にして文言を付加しながら、道教委として、このスクール・ミッションを策定しました。

【橋場委員】

分かりました。

【山本委員】

私立高校や市町村立学校が、存続を懸けて特色ある学校づくりをしている中で、道立高校について、設置者である道がスクール・ミッションを再定義するのは、大切なことだと受け止めました。

1つ質問です。私が校長として勤務していた頃にも、校訓、学校教育目標や経営方針、教育課程編成方針など様々なものがありましたが、今回のスクール・ミッションやスクール・ポリシーというのは、これらと全く同じではないにせよ、かなり近いものと理解して良いのでしょうか。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

委員御指摘のとおり、学校には、校訓や学校教育目標などがありますが、それらは、ほぼ普遍的なもので、学校の状況に大きな変化などが無い限りは変更することはないと思いますし、抽象的な文言で記載されていることが多く、対外的に非常に分かりづらい面もあろうかと思えます。

また、先生方も、これらをきちんと理解した上で教育活動を行っているのかというと、それらの関係性、関連性に理解が十分行き届いていないというようなこともあったのではないかと思います。

このため、今回、校訓や学校教育目標などとの関連性も図りつつ、対外的にも分かりやすく、先生方も教育活動に反映しやすくなるように、具体的な文言でスクール・ミッションの再定義をするというのが、国の

方針です。この方針に従い、道教委として提示したものについても、どのような学校なのか、どのような人材を育成するのかといったことが具体的に分かるように示しています。

【山本委員】

分かりました。道立高校の約7割が普通科の高校ですが、それらが十把一絡げということではなく、それぞれの魅力に光が当たるようなものを作ってください、その結果、子供たちの意欲の向上につながっていくことを期待しています。

【青山委員】

私が生徒だった頃は、学力重視で、学力によって2、3校から選ぶような感じでしたが、今回のスクール・ミッションというのは、進学だけではなく、働くためのスキルなどを身に付け、伸ばすことができる高校があるということを打ち出す位置付けのものということでしょうか。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

スクール・ミッションには、学力で入学するというよりも、どのような資質・能力を身に付けるために高校に行くのかという視点で、身に付けることができることを理解した上で学校を選択し、入学してもらいたいという思いを込めています。委員御指摘のとおり、学力だけで選択するという事は、私たちも重視していないところです。

【青山委員】

もう1点ですが、学校のことを、分かりやすくコンパクトに伝えるキャッチフレーズのようなものが良かった方が良いのではないかと思います。資料の記載を見ても、保護者としては、どのような違いがあるのかが分かりにくく、どの高校に進学するのが良いかを子供と一緒に話し合うきっかけには、なりづらいのではないかと思います。小学生の子供、中学生の子供が見ても分かるようなキャッチフレーズをお考えになる予定はありますか。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

今回のスクール・ミッションについては、設置者として、どのような学校なのかといったことを定義をするものということですが、それとは

別に、それぞれの学校では、キャッチフレーズやPRするポイントなどについて、学校説明会の中で説明をしたり、ホームページで公開したり、学校案内で示したりしています。

【青山委員】

学校それぞれで決めているということですね。

【唐川学校教育局長】

そうです。

【川端委員】

例えば、私の場合は、スペシャリスト、プロフェッショナルになることを自己選択して生きてきた人間だろうと思いますが、子供たちにとっても、このスクール・ミッションが、多くの選択肢の中で、どのような道に進んでいくために、何を学んでいくかという見方をするための指針になってほしいと思います。

もちろん、今、この取組を始めたからといって、子供と一緒に考える保護者からすれば、「自分たちはこうだった。」「自分たちの世代はそうではなかった。」といった思いや考えもあって、学校の特色を見て選択することに不安を感じるようなことも、もう少し続くのかなと思います。ただ、恐らく、このスクール・ミッションは、自分のやりたいことや身に付けたいことなどへの目標を持っていきましょうという中で、様々な選択肢があることを魅力的に伝える方法の一つへと変わっていくのではないかと思います。このように言っている私自身も、学校の場所や学力で選びがちな人間ではあるのですが、もっと広い視点で、スクール・ミッションが、子供が学校を選ぶときに一緒に見て、進学先を判断するための材料の一つになってくれれば良いと思います。

また、地域によっては、学校存続に向けての魅力化という要素もあることと思います。学校として、どのような方向性を目指しているのかについて、地域の方への説明も十分にさせていただき、より魅力ある学校となるよう情報発信をしていただきたいと思います。

【渡辺委員】

生徒の側も、カリキュラムなどを参考にしながら学校を選んで受検す

るという流れになると思うのですが、カリキュラム充実のため、教員側に更なる専門性が必要になったり、学校外の方を呼んだりするようなことも必要になってくるということでしょうか。

【唐川学校教育局長兼ICT教育推進局長】

高校では、令和4年度(2022年度)から、年次進行で新しい学習指導要領が導入されますが、その冒頭に示されているのは、社会に開かれた教育課程についてです。今後の高等学校は、様々な社会の方々の協力を得ながら学習を進めていくことが大前提になりますので、そのような意味では、先生方だけで教えていくという時代ではなく、地域の教育人材を活用しながら進めていく学校が多くなっていきます。

【倉本教育長】

今回のスクール・ミッションの再定義と同時に、生徒になろうとする方に、その意義を伝えていくということが大事だろうと思いますので、しっかり取り組んでいきたいと思います。

ほかに御質問や御意見はありませんか。

《委員から質問・意見なし》

【倉本教育長】

それでは、以上で本件の審議を終わり、報告を了承します。